







忘れがたみ

文學博士 外山正一 述

風の音さへ聞えず

いと静かなる冬は夜は

星月夜なるは何となく

哀れなる心地せられけり

夜は更け行くまゝよ

ゆき通ふ人も次第に途絶え

庭に鳴く露の命は蟲乃音は

絶え絶えこそ聞えけれ

丑三よは尙ほ程あれども  
晝乃かせぎよ疲勞たる  
賤の身は手足を伸して  
はや熟睡せるも尠なからず

明日の竈乃細き烟ハ  
立や立たずと行燈也  
暗き景にて繰返しく  
僅かなる賣溜也  
錢を算ふる夫婦乃者あり

乳呑子よ乳房をはませ  
脊を叩きて寐かしつゝ  
子は行末を案じ煩らひ  
夜は更け行くも志らざる親あり

神に願かけ佛に祈り  
薬よ灸と手に手を盡し  
我れは死すとも最愛の  
子の命をは助けんと  
心を碎きし甲斐もなく

命數已に盡きしにや  
玉の緒の絶えて果敢なく  
消え失せし子のなきがらに  
抱き付きて今は早や  
此世に生くる甲斐もなしと  
よゝと啼き入る母親あり  
百年の後までも  
老いたる親に孝行盡し  
海より深き大恩に

行末ながく報いんと  
誓ひしことも水の泡にて  
まだ萬分の一だにも  
盡さぬうちに親ははや  
歸らぬ旅に門出したれば  
夢かど計り思へども  
偕あるべきにあらざれば  
泣くくゆくわんを爲し終り  
戀しき親のなきがらを  
今や柩に殮めんと

氣を勵ませど若者は  
せきくる涙せきあへず  
只茫然として涙みたり

蝶よ花よと掌の中は  
玉の如くに育てたる  
獨り娘は明日は目出度き婚姻にて  
其喜びと支度のためは  
家内は上を下への騒ぎ  
父母は疾くけふの夜の過ぎ去りて

明日の來たるを待ち兼ねるに  
恍惚子氣の慚かしさにて  
何事をなせども更に手に付かず  
寐ても寐られぬ娘あり

明日は主君は面前にて  
佞人原の惡事をあはき  
事宜によりては差違へ  
我れも共々相果てんと  
忠義の覺悟は金鐵にて

只一心に君の爲めを  
思ふてねたはを合する武士あり

實に人は果敢なきものなり  
今日<sup>け</sup>は夜はまだ過ぎ去らざるに  
ひたすらに明日<sup>あ</sup>日<sup>あ</sup>後<sup>あ</sup>日<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>にのみ  
兎角心を移しがちにて  
如何なる天の災が  
すら眼前に迫ればとて  
一寸先はやみの譬へ

明日ともいはず今宵のうちに  
深き淵瀬に陥る身とは  
露志らずして百年は  
計をなすこそ哀れなれ

風なく雨なくいと静かなりし冬は夜は  
忽ちにして奈落の底を見るに至れり

泣く者も笑ふ者も  
喜ぶ者も怒れる者も



舞ふ者も唄ふものも  
樂しむ者も悲しむ者も  
均しく一度に聞きたるは  
地底に聞えし大山の  
崩るゝ計りの響きなりけり  
すさまじき勢にて  
大地は下より突き上げられ  
地上はさながら激浪の  
打つが如くに震ひ動けり

安政二年十月二日  
時刻は夜の亥の刻かどよ  
地裂け天落るかど驚かれたり  
見るゝ百萬の人家  
倉庫神社佛閣  
倒るゝあり崩るゝあり  
家に志かれ瓦に打たれて  
死せるは幾許なるやを志らず

一時に落ち來る千萬の瓦  
 一時に崩るゝ百萬の家の響は  
 泣き叫ぶ老若男女の聲に和して  
 譬ふるにもものあらざりけり  
 暫らくして地の震ひ稍おさまり  
 崩るゝ家の響薄らゝに隨ひ  
 あとに残りて聞えしは  
 親を呼ぶ子の聲なり  
 子を尋ぬる親の聲なりけり

近くにも遠くよも  
 殊に哀れに聞えしは  
 次第くに細くなる  
 助けてくれ助けてくれの聲なりけり

理りなる哉  
 梁に壓さるゝ者あり  
 柱に挟まるゝ者あり  
 土に埋まる者あり  
 壁に志かるゝ者ありて

さなきだに苦しむ者は多かりしに  
 地の震ひ動くこと  
 未だ息むか止まざるよ  
 四方の天は一面に  
 次第く明かるくなりて  
 さながら晝如くなり志は  
 所々方々の潰れ家より  
 火は炎々と燃え出し  
 焔が天を焦がせしなり

家に潰されて身は動かず  
 悶え苦しむ其所に  
 燃え来る火の爲めに  
 烟に咽び熱さに耐へかね  
 遁れんとしてあせれども  
 のがるゝとは叶はねば  
 聲を限りに叫べども  
 助けに來たる人はなく  
 無間の地獄阿鼻の熱  
 無慚といふも餘りありけり

此夜僅かの時の間に  
 死したる人の其數は  
 幾萬なるかを志らざるが  
 中にはいとも哀れなる  
 死にさまの者も多かりけり  
 運強くして不思議にも  
 其身は萬死を遁れしも  
 親兄弟の無慚の死を  
 漫ろに悲しむ者もありけり

枕を並べて臥し居たる  
 夫婦にてありながら  
 夫は梁に壓し潰おされしも  
 妻は牘ひたの抜けたる爲めに  
 下に陥り不思議にも  
 命を助かりたるもあり  
 梁に志かれし吾妻を  
 助け出さんとあせれども  
 力及ぼざる其内に

あたりは一面火になりて  
看すく妻の燐死のを  
残して去れる夫もあり

妻子は如何なしつると  
崩れ家を取除け見ればこは如何に  
妻は穴藏に半は埋まり  
片手には稚子の足を抓み  
恨めし氣なる顔つきにて  
色青ざめて死せるもありたり

左れば此夜の不運の者には  
或は祝ひの席に於て  
或は悲しみの最中に  
寐耳に水に死せるなど  
語るも哀れなる者ありしが  
是等は人の身の上なり  
我れにも此夜の話しあり

父は此夜は宿直の  
番にて宅には居らざりければ

家を守り三人の  
 子を護りしは母なりけるが  
 上なる子二人は  
 母の左右に寐ね  
 末なる子は乳母に抱れて  
 枕邊に臥せりけり  
 有るまじき事なれども  
 すは地震よといふとひとしく  
 乳母は抱きし子を捨て、

我れのみ外へと逃げ出たれば  
 母は啼く子を抱きあけ  
 右と左に寐たる子を  
 ゆり起さんとあせりしかども  
 稚子をかゝへし身に  
 大浪にゆらるゝ如く動きつゝ  
 片手で起す左右の子は  
 冬の夜の寐入りほなにて  
 起せどもく  
 いつかなく起くれほこそ

幻まぼろしにて母に連れられ  
 外へ出でたる其時は  
 地のゆるゝのもやみしあとにて  
 四方しやうほうの天てんは火事の爲めに  
 早や紅になり居りたり  
 實に危ふかりしは  
 我々親子の命なりけり  
 开も安政の地震には  
 水地なる舊ふる家の

潰れぬものは希なりしが  
 我等が住ひしふる家も  
 潰れぬ計りに傾きたりけり  
 今に於て考ふるも  
 身の毛のよだつは此夜のとなり  
 此地震にて我等が家の  
 もしや潰れもしたらんには  
 我が兄弟けいだいは死したりとも  
 誰をも恨むべからざれども

もし母が死したらんには  
我等が罪よてありたるならん  
左りながらも去此夜  
我等親子が死したるならば  
何故母が死せしかハ  
世よ知る人ハなかりしならん  
生くべかりしを子此爲めよ  
死せしなりとは誰ろ知るべき

今日よ於て尙ほ忘れざるハ  
此夜のみとなり  
實よ有難きも乃ハ母の愛なり  
母ハ其身の危ふきをも  
顧みばして一心よ  
子を助けんと爲せしも此なり  
實よ深きものハ親の恩なり  
我れよ今日あるハ  
かゝる愛を以て育て呉れたる



母ありたるが爲めなり

我れは自ら<sup>まづ</sup>志らせれども

我が母が此夜の如く

其身の命の危ふきをも

顧みずして我々の

身をば護りてくれたるは

幾度なりしか志れざるならん

此夜のことば亡き母の

我れには忘れがたみなり

此夜我々親子より

運拙くして死せる者には

助かるべきを子の故に

死したる母は幾許なりけん

此夜のことば亡き母の

我れには忘れがたみなり

此夜の如き天災の

もし今日<sup>けふ</sup>の夜に起らんには

助かる命を子の爲めに  
棄てんとするの母親は  
幾許なるか去れざるならん  
實に深きは親の恩なり  
忘れ難きは母の愛なり

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 母、子、愛、恩、難、忘、れ、深、き、親、の、実、に、幾、許、な、る、か、去、れ、ざ、る、ら、ん、助、か、る、命、を、子、の、爲、に、棄、て、ん、と、す、る、の、母、親、は、）

明治二十四年七月十日印刷  
同 年七月十一日出版

非賣品

著述兼  
發行人

外山正一  
東京市牛込區津久戸前町  
廿八番地

印刷人

根岸高光  
同 市牛込區市夕谷加賀町  
二丁目廿三番地

印刷所

秀英舍  
同 市京橋區西紺屋町  
廿六七番地